

生涯学習情報誌

Life Learning

4 2019
Apr.
NO.344



生涯学習開発財団

ソーシャルビジネスグランプリ2019

3月10日(日) 中野ZERO西館小ホール
主催：社会起業大学／デモクラシー2019シアティアイブ

3月10日に開催された「ソーシャルビジネスグランプリ2019」。3.11の前日ということもあり、全員による黙祷から始まった。

社会起業大学の田中勇一学長は「今の世の中は失望と不信ばかり。自分の中にあるワクワクを信じよう」ということを今回のテーマに掲げた。ファイナリストはそれを実践している一例。ぜひ参考に」とあいさつした。

田坂広志名誉学長の基調講演は、「社会起業家は資本主義を進化させ、民主主義を深化させる」のテーマで、今年は後半部分にあたる、社会起業家が変わる民主主義の10のパラダイム転換が語られた。国や官僚に依存する間接民主主義から、国民自らが政策決定・実行に与する直接民主主義への深化には、現世代の利益ではなく未来世代の利益のために何をするかという、社会起業家の資質が欠かせないという。

グランプリと共感大賞をW受賞したのは、渡邊千春さん。福島県二本松市の震災復興に寄与する、風力発電とオーガニックコットン栽培の事業「SUSKENERGY」だった。

高校生も含め多彩だったが、「ワクワク」に寄りすぎて社会性や経済性の詰めが甘い点が、総評で指摘された。

ファイナリストや協賛企業などから多くのブースが出展し、2度のコミュニケーションタイムにPRと交流が図られた。



財団理事長代理・佐藤梨奈（左から2人目）からグランプリ受賞の渡邊千春さんに起業支援金の目録を授与した。



社会起業家は多重人格者であることも必要と、田坂広志名誉学長。



「自分のワクワク」が十分伝わらなかったのが悔しいと田中勇一学長。

社会起業家部門



福島のとそ風で起こすエネルギー革命 実感が伴う「さすけない」復興事業を！
●渡邊千春（わたなべ ちはる）さん

福島県二本松市生まれ。3.11後に福島復興のために風力発電とオーガニックコットン栽培の事業を誘致するも大手企業が撤退。自ら地元優先のエコシステムSUSKENERGYを設立した。「さすけない」は「大丈夫」の方言。



空き家を「人々に夢を与える場所」へと変えていく「アキカツ」
●矢野童夢（やの どうむ）さん

空き家問題を解決しながら、夢を実現したい人の後押しをする不動産マッチングサイト「アキカツ」を計画。自分が大学時代に詐欺にあった経験から、漠然とした夢を具体化するコンサルや資金プランも提供したい。



自発的なご長寿のワクワクが循環 シニアのワクワクを引き出し元気にする！
●二瓶 崇（にへいたかし）さん

要介護だった大好きなおばあちゃんをハワイに連れて行った時、生きてて良かったと喜ばれた。渡航前には歩行練習も始めた。予防介護のお客さんであるシニアに、わくわく生き生き主役になれる場を提供していきたい。

政治起業家部門



通信革命など真の社会価値創造と諸外国から尊敬される日本づくり
●(株)フォーバル代表取締役会長 久保秀夫氏

創業以来「For Social Value」の事業を展開。カンボジアの教員育成など国際貢献活動にも積極的。公益資本主義を唱え「三方よし」「和を以て貴しとなす」「吾足るを知る」などを発信しながら資本主義の変革に取り組む。



クラフトビールから始まる地域の豊かさビールを通して身近な豊かさ・幸せを
●富木 毅（とみき たけし）さん

本当の豊かさや幸福は身近にあると気づき、生まれ育った千葉市幕張で地ビール醸造所兼飲食店を起業。NECの兼業起業制度の走りとなる。大好きなビールで心を開き、ヨガで体を整え、瞑想で素直に感じる場とする。



「やってみたい」に挑戦する場づくり “今”にフォーカスする若きチャレンジャー
●齋藤 慧（さいとう さとし）さん

高校2年の齋藤さん。活発だった中学時代。高校は進路の呪縛や軽薄な人間関係が不満。今やってみたいことに思いっきり挑戦する場「follower」を立ち上げた。自分が動けば周りも熱くなってくれることに気付いた。

鬼の学び

⑤

人生をそろそろまとめよう。

作家／出版プロデューサー／劇団主宰

鬼塚忠のアンテナエッセイ

自分とはいったい何者なのか？ハムレットのセリフではないが、それが問題だ。

今回は、自分の半生を文章にし、世にくっきりとその存在を残すことをおすすめしたい。

物心つく頃から人は、いったい自分は何者なのかと何度も自問する。人生が終盤にさしかかっててもその答えには行き着かない。おそらく、どうあがいたって死ぬまで答えなど出ないだろう。どこかの時点で人生を振り返ったほうがいい。

私は作家のエージェントという仕事をしている。私を含めて7人の社員で年間80冊ほどの書籍をプロデュースする。時には、人の半生を振り返るような伝記も作る。

たとえば、在日韓国人でバイオリン製作者の陳昌鉉氏の半生を聞き書きし、「海峡を渡るバイオリン」（河出書房新社）という書籍を世に出した。のちにその本はフジテレビ45周年記念ドラマの原作に選ばれ、北の国からの撮影チームでドラマが制作され、文化庁芸術祭優秀賞を受賞した。

また、およそ百歳となる、母方の祖母の半生も4日間で20時間ほどインタビューし「恋文讃歌」（河出書房新社）という小説にまとめた。終戦直後に、混乱する朝鮮半島から命からがら日本へ帰国した体験だ。この話も現在映像化が進行中だ。

なぜ、人生の足跡を世に残した方がいいかというと、人が経験したことは、ある意味、書物で学んだこと以上に価値のあるものであり、人々の記憶に蓄積され、共有されるべきだからだ。

人は学ばなくてはならない。それは、先輩たちが作ってくれた知や経験の蓄積をさらう作業であるとともに、さらにそれに上積みし、後世の人たちが読み、疑似体験が出来るようにする。知だけではない。経験もこれから生きる者たちには、きつと役に立つはずだ。この世に生を受け、体験したこと学んだことを世に還すということ。

それには大きく2つの問題がある。ひとつはどうやって文章を書くかという問題。それと、その文章をどのように後世に残すかという問題。

文章の書き方

まずは文章の話。

人は自分の人生を語りたがる。それに従い、産まれた時から今までの出来事を時系列に従って書く人が多い。これではまったく焦点が定まらない。あなたは満足かもしれないが、あなたの文章には誰も興味を示さず、誰も読まない。

肌感覚で、他人は自分の何に興味を持つかは知っているはずだ。例えば、60歳の時、高齢者オリンピックで金メダルをとった話とか、教師歴30年で東大に何十人も合格させた話とか。その特異なところを中心にして深掘りして書くのだ。けっしてどうでもいい話を書いてはいけ

ない。

かといって、書き方を間違えると自慢話ばかりになってくる。自分が言いたいことばかりを書くのではなく、読む人が読みたいことを書くのだ。試しに周囲に聞いてみたらいい。私の何が知りたいか？と。おそらく言いたいことと違う答えが返ってくるはずだ。私が人の企画書をいじるとき、8割がここに起因する。

ここで、ちよつとしたテクニクを教えたい。これは私が著者デビューする作家の卵の方々に伝えていることだ。

本を世に残すのは、出来るだけ多くの人に読んでもらうためだ。つまり出来るだけ多くの人を想定読者とするが、それを念頭に置いて書きはじめると、焦点がボケたものになり、稚拙な印象を受ける。では、どうするかというと、実際に書くときは真逆の発想をし、この話をもっとも聞いてほしい人物をひとりに定めて頭の中に思い描く。その人物が2時間聞いて丸丸理解でき、面白いと思うように、企画書を書く。そうすると、文調や語彙のレベルも決まってくる。難しい言葉を使う必要はない。話し言葉でいい。知性を見せる必要はない。分かりやすく、面白く。たとえば、先の東大に生徒を入れる教師の場合だと、受験生とその親、教師を大きな層を讀者ターゲットとするが、書くときはひとりに絞る。学校で自分の横に机を並べる実際の新米教師に向ける。そうすると、文章がぶれてこないし、書きやすくなる。

では、どうやってあなたの文章を世に残すか？

● 著者プロフィール

鬼塚忠（おにつか ただし）1965年鹿児島市生まれ。鹿児島大学卒業。大学卒業後、2年間かけて、アジア・オセアニア、中近東、アフリカ、ヨーロッパなど世界40か国を放浪。ヨーロッパでお金が底をつき、シベリア鉄道で帰国。帰国時、所持金は1万円を切っていた。1997年より2001年6月まで海外書籍の版權エージェント会社「イングリッシュ・エージェンシー」に勤務。映画の原作、ビジネス書、スポーツ関連書籍など年間60点ほどの翻訳書籍を手掛ける。次に海外の作家ではなく、日本人作家のエージェントをしたいと思い、2001年10月にアップルシード・エージェンシーを設立。現在では作家のエージェント会社の経営者であるとともに、作家、脚本家、劇団もしも主宰でもある。

著書：『風の色』（講談社）2018年映画化。『花戦さ』（角川書店）2017年映画化。日本アカデミー賞優秀作品賞受賞。『Little DJ』（ポプラ社）2007年映画化。『カルテット!』（河出書房新社）2012年映画化。『海峡を渡るバイオリン』（河出書房新社）2004年フジテレビ45周年記念ドラマ化。文化庁芸術祭優秀賞受賞。『恋文讃歌』（河出書房新社）、『僕たちのプレイボール』（幻冬舎）2012年映画化など多数。



おもにふたつある。ひとつはネット上に残す場合。もうひとつは紙にして世に残す方法。もしくはその両方。
ネットで残す場合
ざっくり言うと、ネットにはフェイスブックのように流れていくものと、ブログのように蓄積するものがある。

おすすめは蓄積するブログ、もしくは電子書籍化してアマゾンのkindleで売る方法だ。前者のブログは、無料で出来る。なかでもnoteというブログのウェブサービスなら、簡単に写真や音楽、映像なども挿入できる。手軽に売り買いもできる。電子書籍として出す場合は費用が発生するが高いものではない。ここで、おすすめ



↑noteは、文章、写真、イラスト、音楽、映像などの作品を投稿して公開するWEBサービス。自分の作品（ノート）は、ブログやSNSなどと同様に無料公開でき、売り買いも可能。



↑Kindle ダイレクト・パブリッシングのWEB サイト。原稿さえできていれば数分で世界中に向けて電子出版が可能としている。電子書籍なので出版後もいつでも修正が可能だ。初期費用は無料。日本、アメリカ、ヨーロッパ各国など多くの国で、販売金額の最大70%のロイヤリティを獲得できる。

めするのが、原稿整理をプロの編集者に依頼することだ。ネットで「フリー編集者」と検索すれば山のように出てくるのでプロフィールを見て依頼してはどうだろうか。文章が見違えるように磨かれる。未来永劫誰かが読む可能性があるとすれば、お金がかかっても出来るだけ洗練された文章で残しておきたい。

紙の書籍として残す場合
自費出版と商業出版がある。自費出版は紙代や印刷代、デザイン代など自分で払う。市場に流通させる場合、させない場合がある。印刷屋に印刷製本だけ任せ、流通させなければ安く済むが、流通まで任せるとそのらの印刷屋に任せるだけでは済まず、専門家に依頼しなければならぬ。軽く百万を超え、金銭的出費は免れない。

商業出版という道もある。原稿を書き上げ、出版社の編集者に送って判断してもらうという手段をとる。誰にコンタクトするかは、類似する書籍を読み、そのあとがきに編集者への謝辞が掲載されているはずである。その人にコンタクトするのがいいだろう。まずは企画書を送ればいいのか。興味があれば会ってくれるはずだ。原稿を持参するか、事前に送ればいい。もしくは私のたちのようなプロデューサーにコンタクトすれば相談に応じてくれるだろう。ぜひ秀逸な作品を書き、商業出版まで持っていくっていただきたい。

重複するが、誰にだって、世に残すべき経験や知識があるはずだ。

人の体験を疑似体験すること、人の知見を吸収することとは学びである。

ぜひ挑戦してほしい。あなたの人生が他人の人生に役に立ったり、影響を及ぼしたりすることを考えると、文章にまとめることは楽しいはずだ。

有田とフランス人間国宝「ワザノワ会議」

伝統技術を未来につなぐ

日仏最高峰の『ワザ』の交流

日本とフランスは、ともに伝統文化の遺産を尊ぶ国であり、技術の維持継承のために人間国宝（仏ではメートル・ダール）という制度がある。

昨年、東京国立博物館で開催された「フランス人国宝展」に出展したフランス人作家を有田に招き、シンポジウムや共演展示、ワークショップなどを行う「ワザノワ会議」が、2018年11月18～25日に開催された。伝統文化の継承と国境を越えた技術交流を目的とした芸術祭は、来場者20名からスタート。SNSや口コミで広がり、最終日には180名と大盛況で幕を閉じた。

■日仏最高峰の技が集結

メイン会場は、日本で最初の陶磁器品評会「有田陶磁器市」が開かれた桂雲寺。会場のデザインは、パリを拠点とする建築家・空間デザイナーのリナ・ゴットメ氏が手がけた。コンセプト

は『対話』で、「有田を訪れると、イノベーションは交流の中で生まれるのだと実感する」と話した。



ゴットメ氏

注目のコラボレーションは、有田焼の若手創作絵師の華仙氏と、38歳の若さで人間国宝に認定された扇作家のシルヴァン・

ル・グエン氏。華仙氏は完成作品の前に「自分の紋様デザインがこんな素敵な扇になることに驚きました。とても嬉しいです」と感激の様子だった。



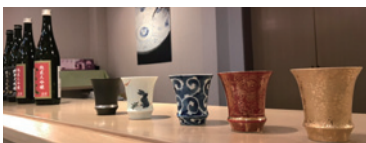
華仙氏とル・グエン氏



ゴットメ氏が手がけた日仏作品の展示空間



ル・グエン氏に指導を受ける子どもたち



【主催】ワザノワ会議準備室
 【後援】フランス大使館、佐賀県、有田町、（公財）金子財団、（社）九州観光推進機構、
 「肥前窯業圏」活性化推進協議会、（財）生涯学習開発財
 【協力】文化庁地域文化創生本部
 【特別協賛】井上萬二窯、今右衛門窯、柿右衛門窯
 【協賛】佐賀県外・県内企業、有田町内企業各社

ワークショップは、ル・グエン氏の「折り紙を使った扇子づくり」、ゴットメ氏の「有田の町屋を使った空間演出」と、日本の文化や伝統建築を活かしながらのイベントになった。桂雲寺では、グエン氏と日本人作家らによるシンポジウムも開催された。

伝統の様式を守りつつ芸術性を追求する日本の作品と、異文化を取り込み大胆な芸術的表現をするフランスの作品との違いも興味深かった。